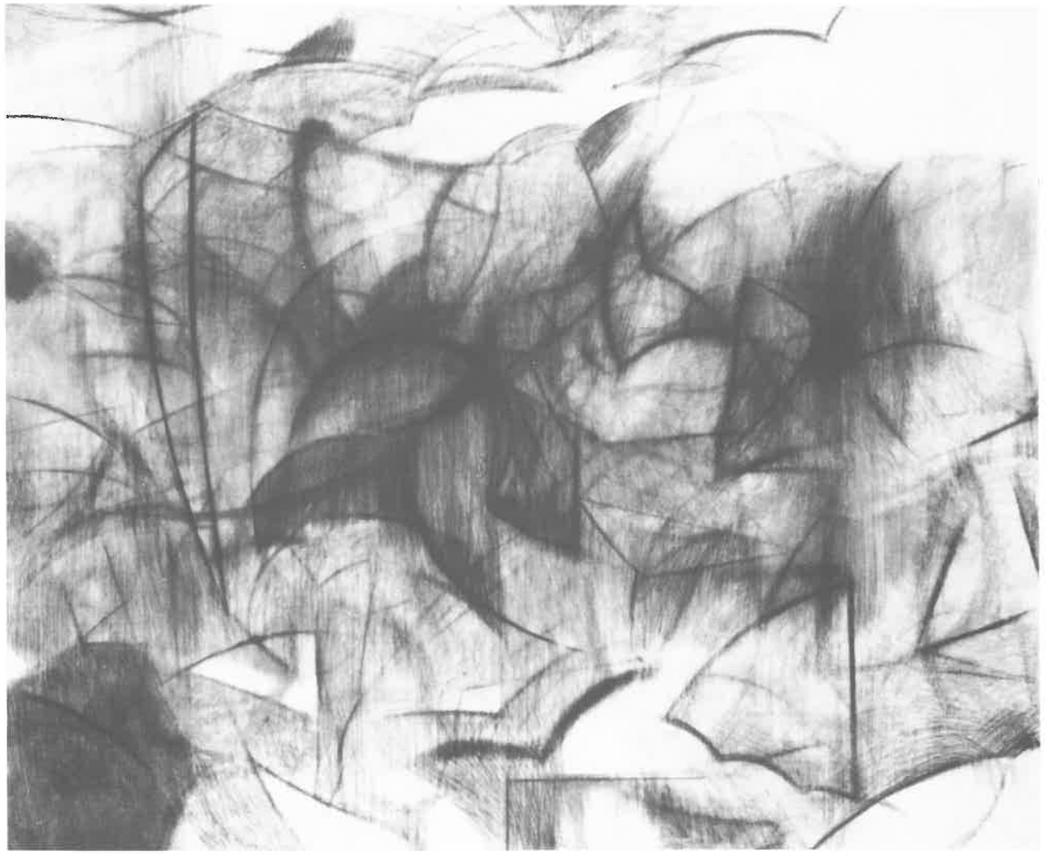
TAKUMI ART NEWS
制作発行：画廊 匠　1987年4月7日　No.12
画廊　匠　宜野湾市大山３１２番地
Phone　09889(７)7981

87企画―3　知花　均　展　４月７日㈫―４月29日㈬（月曜休廊）

GALLERY TAKUMI



Lines　175×213㎝　1987

線・面・崇高

翁長 直樹

学生時代、知花均は「上昇する水平線」というシリーズで、紙にグワッシュや油彩を使用し、素速いスピードでかなりの数の習作を試みている。知花は自宅から見渡せる水平線をモチーフにして作品を描くことを考え続けていたが、ある強烈な音楽体験(演奏会でモーツアルトの交響曲を聞いたこと)を通して水平線が陸続として湧き上っていくというイルージョンに捉えられ、それがイメージの描写を可能にしてくれたらしい。

その後知花は、直接カンバスや紙に、手の勢いにまかせて、線を引き、その中から、形を見つけだしていく、いわゆるオートマチスムに近い手法に傾いていく。パステルや、クレヨンなどで画面の上方にからまって伸びていく線を無数に引き、消したり、起こしたりすることにより、空間を分割し、面をつくる。画面全体は「上昇していく」過剰な情熱を帯びている。もっとも色彩はかなり生硬で、濁っていて、表現主義的である。

知花の語るところによれば、『「崇高性」ということを意識しており、それは常に自分の内在のテーマである』という。

ロマン主義の時代から抽象表現主義の画家達へ受けつがれたこの概念は、ローゼンブラムによって「抽象的崇高」として定着した。宗教的、神秘主義的、超人的な響きもする語である。

愛知芸大の院時代になると、初期の表現主義的、うねり曲って上昇していく線や面、色彩に変って、閉じた円に近い線が多くなり、一本の線が—絵画の根源的なものであるが—空白を分割し、背景に退くことによって空間を生み出すように意図されている。やや冷めた目で、意志的に「描くこと」を考えていたのであろう。

大画面に、コンテで凄じい勢いと速さで描かれた最近作は、ほとんど黒一色で埋められ、線は同心円状に走り、分断され、途中で結合し、面が介入する。ストイックであるが、再び表現主義の立ち返りを感じさせるものとなっている。

再現性を捨てた抽象絵画の課題は、ルネサンス以後の美術を支えた空間形式を絵の内容として還元することであった。ところが、今では現代美術は存立構造や制度をも問題にしており、画面の中でのみの仕事には安住して居られなくなった。何故なら、現代美術とはそもそも思考そのものであるのだから。知花はそれを自覚しつつ、自らの「崇高性」のある絵画宇宙を築きえていくことができるか、これからが力仕事だと思える。

Lines 175×213 cm 1987 部分

■ 知花 均 プロフィール

1961 読谷村に生まれる
1983 琉球大学教育学部美術工芸科卒業
1985 愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了
1983 琉大卒業記念四人展(県民アートギャラリー)
1983 NEW E・W・L・L版画展(銀座 ギャラリー・デコール, 名古屋 丸栄スカイル ギャラリー)
1984 上野の森美術館絵画大賞展
第9回大学版画展(東京 丸の内画廊)
1984 NEW E・W・L・L版画展(名古屋 丸栄スカイル ギャラリー)
1985 「ANOTHER SIDE展」(名古屋 ギャラリー・ラブコレクション)